

インド留学記

その10

水の都

スリナガル(2)



東方学院講師
駒女短大講師
阿部慈園

5

スリナガルおよびその周辺に咲いている花としましては、紫色や白いアヤメ、また水仙がよく目につきました。とくにアヤメは、墓地に群生していて、当地の人びとはこの花を「墓地の花」といつていました。

よく知られていますように、インドのヒンドゥー教徒たちは、遺骸を荼毘に付したあと遺骨

を、ときには半焼けの遺体をすべて川に流してしまいますが、回教徒（ムスリム）たちは遺体をかならず墓地に埋葬し、お墓を造ります。スリナガル郊外のとある墓地のまわりに卒塔婆に似たものがたてられていて、心ひかれました。ここ以外の北インドや中・南インドの回教徒の墓にはそういうものがたてられているのをまったく見たことがなかったからです。カシュミール地方はかつて仏教が盛んでしたから、ひよつ

とすると何かしら仏教と関わりがあるのでしょ
うか。

また、樹木は、白樺や柳、モミジなどが多く、
少し高地に行きますと松や杉が目につき、日本
のものとまつたく共通でほつとする想いがあり
ました。けだし、スリナガルあたりの緯度は、
わが国とほぼ同じですから、同じ木や花が目に
触れるのは当然のことかもしません。

6

こここの男たちは、一、三人寄りますと、よも
やま話しをしながら、水タバコをまわしのみし
ています。タバコそのものは細かいきざみで、
茶褐色で、手でさわるとベトベトしており、か
すかに異臭を鼻に感じます。きざみの上に火ダ
ネをのせます。吸い口を強く吸いますと、ガボ
ガボと水タバコ器の底の水が音をたて、強いけ
むりがもろに肺に入ってきて、吸いつけないわ

たしはせきこんでしました。かといつて、
軽く吸つてもタバコのけむりは出でません。
あまりうまいものではありません。水タバコ器
の高さは、五〇から六〇センチメートルほどで、
外側は鮮やかに彩色されていました。

かれらは、また、ハツシツシをよく吸います。
市販のタバコには税金がうんとかかっていて、
他の物品に比べても高価ですから、そのかわり
の嗜好品として安価なハツシツシを吸うのだと
いいます。これを吸つてかれらがアラーの神に
祈りますと、心がますます澄んできて、神に柔
順になるともいいます。

ハウスポートの息子ユスフが、その作り方を
教えてくれました。ハツシツシの原料となる草
(名前は不詳、ヨモギに似た草)を乾燥させ、
これをよく手でもみ、黄色くなつたところで、
ある種の油を加え、さらにもんで、ボール状に
するのだといいます。

ふつうは、茶褐色になつたハツシッシのかたまりをこなごなにして、紙巻タバコのきざみに混ぜて、混ぜたものをまたもとの紙巻タバコのきざみに戻して吸います。比較的多量のその粉を直接パイプに入れて吸つているヨーロッパ人を見て、驚いたことがあります。これが常習になると、肝臓に障害をきたすということです。ネ・パール

のポカラでは、この粉をケーキに混ぜたり、紅茶に入れてのむという話も聞きました。オランダあたりでは、ふつうのタバコより害が少ないということで政府はハツシッシを許可しているそうですが、わが国では大麻たいまや LSD と同様に、そのもちこみを禁止しています。

7

五月上旬のスリナガルの気温は、摂氏十五度前後で、雨の降つた日には十三度にも下がり、身体がガタガタふるえたことを覚えていました。

南のプーナは四十度前後かと思うと、インドはほんとうに広いなあと実感しました。

スリナガルへは翌年（昭和五二年）にも訪ねるチャンスがあり、さらに五年後の同五七年の五月には、あこがれのハネムーンでこの地を踏むことができました。

同月九日、デリーを飛びたつて、スリナガル空港に降りたちました。ハウスボートまでの道すがら、車窓から、雪のような綿のようなもののが空中に舞いあがり、そしてそれらが道路や湖に舞いおちるさまを家内とともに見ました。何かの木の花の纖維とおぼしきもので、そのメルヘンチックな光景に見入る彼女の目は、まるで酔つているかのようでした。

ムガール庭園を三つ訪ね、近郊のパルガムでポニーに乗りました。家の同月十日の日記の一節を紹介して、本稿を了とします。

白樺の木の美しさ。水の豊かさ。緑の美

しさ。アカシヤの花がスリナガルを甘い香りで満たしている。そのアカシヤのすばらしさは、アカシヤといえばスリナガル、スリナガルといえばアカシヤというほどにすばらしいのです。日本で見る真白のと、薄紫色のとがありました。どちらも、その房の大きさ、香りの甘さは、日本を思わせました。

パハルガムというところで、ポニーに乗りました。三時間の契約だということでしたが、三十分も乗らないうちにおしりが痛くなつて、川の岸辺に休んでばかりいました。岸辺には、なんと忘れな草が自生していました。たんぽぽも咲いていました。日本で見るほんどの花を見ることができました。

「ウッド・ストック」というホテル兼レストランでコーヒーを楽しみました。なんと

それを運んできたボーアさんは、ネパールから働きにきている人でした。ネパールからはパスポートなしで働きにこれるとのことでした。慈園さんにいわせると、インドはネパールを属国のように扱っているとのことでした。なんとなくホツとさせるボイさんの顔の表情なのでした。（つづく）

